

日本心理学会第69回大会ワークショップ企画

WS107

## 新たな簡易注意機能測定法の開発と適用可能性 注意・認知機能分類の再構成化を探る

日時：2005年9月12日(月) 15:30~17:30

場所：慶應義塾大学三田キャンパス南校舎 4F 446教室

- 企画者 神田幸治（名古屋工業大学） 篠原一光（大阪大学）
- 司会者 神田幸治（名古屋工業大学）
- 話題提供者 山田尚子（甲南女子大学）  
「失敗傾向質問紙の開発とその適用可能性」
- 大橋智樹（宮城学院女子大学）  
「複合数字抹消検査の開発とその適用可能性」
- 鈴木大輔（東北大学大学院）  
「注意機能尺度の開発とその適用可能性」
- 篠原一光（大阪大学）  
「日常的注意経験質問紙の開発とその適用可能性」
- 指定討論者 山下富美代（立正大学） 箱田裕司（九州大学）

日常的な「安全」「失敗」の経験は、それを遂行する人間側の特性に起因する問題として、近年とりわけ注目を浴びるようになった。こうした背景の中、臨床分野にとどまらず、生活場面や産業場面等の日常場面を対象とした認知や注意機能測定法に関する研究が、新たな角度から進められるようになってきた。このアプローチの目指すところは、以下の2点に集約されるであろう。一つは、基礎実験的研究の立場から注意・認知機能の包括的な分類を見直すことにある。いま一つは、注意機能の個人差を測定する新規かつ簡便な注意機能測定法を開発することにある。その試みは、注意研究における基礎理論の構築に資するのみならず、注意要因により生起するヒューマンエラーの低減対策に活用されることが期待できる。そこで本ワークショップでは、こうした注意機能分類やその測定法に関連する研究に精力的に取り組んでいる気鋭の若手・中堅研究者に話題提供を依頼した。話題提供者諸氏には、基礎実験からのアプローチ、日常生活上の注意機能分類、新たな質問紙やテストの開発などの様々なフェイズにおいて、各自のテーマに基づいたホットな研究報告、研究動向等を紹介していただく。そして、日常生活場面を考慮に入れた認知・注意質問紙やテスト実施による注意機能分類並びに測定法の意義、有効性、問題点等について、フロアを含めた参加者全員で議論を深めるとともに、今後の発展可能性を模索していきたい。

## 注意機能尺度 (2因子版・3因子版)

鈴木 大輔(東北大学大学院)

- 【回答形式】 5点尺度による質問紙法 日常生活における様々な行動場面について回答
- 【体裁】 A4版1頁 質問14項目(2因子版), 13項目(3因子版〔2因子版を改訂〕)より構成
- 【測定内容】 2因子版と3因子版で各々異なる
- 2因子版
- [能動的コントロール]  
注意の容量を自分自身で制御する能力を測定
- [多動性]  
不必要な情報への注意の引きずられやすさ, 注意維持の失敗傾向, 衝動性傾向を測定  
(注意維持の失敗傾向, 衝動性を測定する側面が強い)
- 3因子版(2因子版を改訂)
- [分割]  
注意の分割能力(同時に複数の対象に対して注意を向ける能力)を測定
- [多動性]  
不必要な情報への注意の引きずられやすさ, 注意維持の失敗傾向, 衝動性傾向を測定
- [切り替え]  
注意の切り替え能力を測定
- 【所要時間】 1~2分
- 【特徴】 本質問紙において, 作成者は純粋に注意機能のみを測定する尺度"注意機能尺度"を開発している。特に日常生活の行動場面で必要となる注意機能の測定をめざし, これまで2因子版と, 2因子版を改訂して開発された, より詳細に注意の能力が測定できる3因子版の2種類の尺度を開発している。
- 【開発者連絡先】 鈴木 大輔 daisuke@cog.is.tohoku.ac.jp  
東北大学大学院情報科学研究科応用情報科学専攻  
〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3-09

■以下の質問は、あなたの行動や能力に関するものです。質問を読み、その内容についてどのくらい当てはまるのか、例に従って該当する数字に○をつけて下さい。

- 例
- |                                | あてはまる                     | ややあてはまる | どちらでもない | あまりあてはまらない | 全くあてはまらない |
|--------------------------------|---------------------------|---------|---------|------------|-----------|
|                                | 4                         | 3       | 2       | 1          | 0         |
| 1. 済んだことをくよくよ考える。              | 4-----3-----2-----1-----0 |         |         |            |           |
| 2. 騒がしい状況でも、相手の話を聞き取ることができる。   | 4-----3-----2-----1-----0 |         |         |            |           |
| 3. 複数人の話を同時に聞いても混乱しない。         | 4-----3-----2-----1-----0 |         |         |            |           |
| 4. 作業の手を休めることなく人の話が聞ける。        | 4-----3-----2-----1-----0 |         |         |            |           |
| 5. 自分の探しているものが目の前にあっても気がつかない。  | 4-----3-----2-----1-----0 |         |         |            |           |
| 6. 講演会や音楽会などで長時間じっと座っているのは苦手だ。 | 4-----3-----2-----1-----0 |         |         |            |           |
| 7. 人の話を聞いていないといわれる。            | 4-----3-----2-----1-----0 |         |         |            |           |
| 8. 周りが騒がしくても気にせず作業できる。         | 4-----3-----2-----1-----0 |         |         |            |           |
| 9. うまく気持ちの切り替えができない。           | 4-----3-----2-----1-----0 |         |         |            |           |
| 10. 作業に集中しながら、同時に他のことも考えられる。   | 4-----3-----2-----1-----0 |         |         |            |           |

## 日常的注意経験質問紙

篠原 一光(大阪大学大学院)

- 【回答形式】 5点尺度による質問紙法 日常生活で起こりうるさまざまな注意経験の頻度を回答
- 【体裁】 A4版5頁(Ver.3.0)  
 注意経験の場面想定1項目(「勉強」または「仕事」のいずれかを選択)  
 想定内容自由記述1項目(どのような勉強・仕事をしているところか?)  
 想定作業評定15項目(主観的メンタルワークロード測定で用いられる評定尺度を利用)  
 注意経験32項目より構成
- 【測定内容】 4因子を測定
- [注意集中能力]  
 目標とする課題に対して集中する能力を評価
  - [認知制御能力]  
 複数課題の同時遂行や、新しい課題状況への適応を評価
  - [注意転導の起こりやすさ]  
 内的・外的刺激により、注意すべき対象から注意が逸れることの起こりやすさを評価
  - [ながら作業傾向]  
 いわゆる「ながら」仕事・勉強をする傾向を評価
- 【所要時間】 約15~20分
- 【特徴】 普通の(=心理学的知識を持たず自分の認知活動を分析的に考えることがあまりない)人が日常生活の中で経験し認識するような注意に関わる体験の多さから、日常生活の中で用いられる注意機能の働きの特徴を評価することを旨とする。また実験を行う場合に、事前に実験参加者の注意特性を簡便に確認する方法として開発しているので、短時間で終了し、実験参加者に与える負担も少ないという特徴を持つ。
- 【開発者連絡先】 篠原 一光 [sinohara@hus.osaka-u.ac.jp](mailto:sinohara@hus.osaka-u.ac.jp)  
 大阪大学大学院人間科学研究科 〒565-0871 吹田市山田丘1-2

	とてもあてはまる	ややあてはまる	いどちらかなど	あてはまらない	あてはまらない
1. 勉強・仕事に集中できなくなった時、努力しても集中力を取り戻せないことが多い。	-----	-----	-----	-----	-----
2. 会話中に、自分の思っていることや考えにとらわれて相手の話から注意がそれることがよくある。	-----	-----	-----	-----	-----
3. 初めてすることでも、すぐに要領をつかむことが多い。	-----	-----	-----	-----	-----
4. 電話で世間話をしながら新聞や雑誌を読むことがよくある。	-----	-----	-----	-----	-----
5. すべきことが二つある場合、それぞれを一つずつ済ませるよりは、二つを並行して行うほうだ。	-----	-----	-----	-----	-----

## 失敗傾向質問紙

山田 尚子(甲南女子大学)

【回答形式】 5点尺度による質問紙法 日常生活で起こりうるさまざまな失敗行動の頻度を回答

【体裁】 A4版2頁 質問25項目より構成

【測定内容】 3因子を測定

[アクションスリップ]

行為の実行に十分な注意が向けられないために起こると考えられる失敗項目から構成  
“放心”と“もの忘れ”の項目群を含む。

[認知の狭容]

不安など内外のストレスによって注意が妨害されることにより,状況に対して適切な判断  
や問題解決ができなくなる項目から構成  
“妨害されやすさ”と“とらわれ”の項目群を含む

[衝動的失敗]

見とおしの悪さや計画を立てずに行動することで起こる失敗項目から構成

【所要時間】 約10分

【特徴】 広範囲の失敗行動を項目として用いることで,3種類の“失敗しやすさ”を捉えることができる。また,どの失敗傾向が,どんな状況で実際の失敗に結びつくのかを調べることで,失敗に関連する状況要因をより詳細に検討することができる。

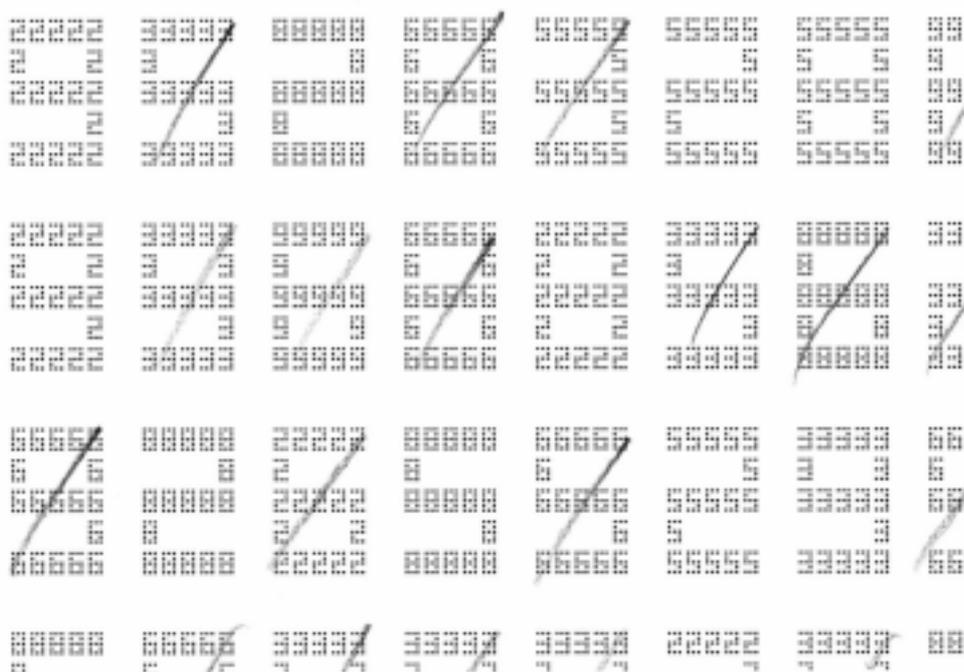
【開発者連絡先】 山田 尚子 yamariri@konan-wu.ac.jp

甲南女子大学 〒658-0001 神戸市東灘区森北町 6-2-23

- |   | 非<br>常<br>に<br>よ<br>く<br>あ<br>る | か<br>な<br>り<br>あ<br>る | 時<br>々<br>あ<br>る | あ<br>ま<br>り<br>な<br>い | ま<br>っ<br>た<br>く<br>な<br>い |
|---|---------------------------------|-----------------------|------------------|-----------------------|----------------------------|
| 1. 手に持っていたものをなげなくそこに置き、後になって<br>どこに置いたか思い出せなくなることが..... |                                 |                       |                  |                       |                            |
| 2. 早く決めるように急がされると、よく考えずに決めてしまい、<br>後で後悔することが.....       |                                 |                       |                  |                       |                            |
| 3. その日の予定が空いているかどうか、確かめずに約束して<br>しまうことが.....            |                                 |                       |                  |                       |                            |
| 4. 何か用事があってその部屋に行ったのに、何をするため<br>だったのか思い出せないことが.....     |                                 |                       |                  |                       |                            |
| 5. 責任の重い仕事をまかされると、緊張して自分の力が<br>出せないことが.....             |                                 |                       |                  |                       |                            |
| 6. 残りのお金のことはよく考えずに、買い物をする.....                          |                                 |                       |                  |                       |                            |
| 7. 何かを思い出そうとしていて、のどまで出かかっているのに、                         |                                 |                       |                  |                       |                            |

## 複合数字抹消検査 (Compound Digit Checking Test; CDCT) 大橋 智樹(宮城学院女子大学)

- 【回答形式】 標的抹消による作業検査法
- 【体裁】 B4版横置き7頁 練習試行1試行, 本試行5試行より構成
- 【測定内容】 複合数字パタンの全体・部分レベルに対するさまざまな視覚的注意定位特性を測定
- [G%] 全体レベルに対する注意配分特性
  - [L%] 全体レベルに対する注意配分特性
  - [GG%] 全体レベルに注意焦点サイズを維持する特性
  - [LL%] 部分レベルに注意焦点サイズを維持する特性
  - [GL%] 注意焦点サイズの収縮に関する特性
  - [LG%] 注意焦点サイズの拡張に関する特性
- 【所要時間】 教示を含めて約15分
- 【特徴】 部分数字から全体数字が構成される複合数字パターン配列から, ターゲット数字が含まれているパターンを抹消する作業検査で, 視覚的注意機能の特性を測定できるほか, 注意機能訓練ツールとしても利用が可能である。
- 【開発者連絡先】 行場 次朗 gyoba@sal.tohoku.ac.jp  
東北大学文学部心理学研究室 〒980-8576 仙台市青葉区川内  
大橋 智樹 ohashi@mgu.ac.jp  
宮城学院女子大学 〒981-8557 仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1



本資料に掲載されている質問紙及び検査は現在開発中であり，研究過程において様々な検討が加えられています。それゆえ，尺度構成の変更や因子の見直しなどが行われている場合があります。質問紙や検査をご使用いただく際には，開発者にご確認ください。